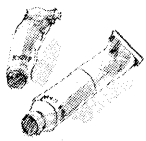
土をこねる

津守　真



現代の科学的な物の見方では、目に見えて、耳に聞こえることが重視される。視覚と聴覚にふれないものは、存在すらも疑われる。樹木も、山も、空も、月も、神秘さや、不思議さを失い、見えた限りの物質のかたまりになってしまった。深く探究する科学者は、このような表層的な見方をしないであろう。科学の時代に住む一般人の周囲の物の見方が、外面的になってしまったのである。

現代人が子どもを見る見方も、その例外ではない。子どもの外側の、目に見える部分だけしか見ない傾向はますます強くなりつつある。子どものすることは、おとなよりも力が弱く、小さなことしかできないこと。こういう能力の多少を見ることは容易である。しかし、子ども自身の内部の世界があることに気がつかない。たとえ、小さな赤ん坊でも、気持ちがよかったり、不快だったりする感じ方があることに気がつかない。だから、赤ん坊が泣くとき、母親は、どうして泣くのだろうと原因を詮索する。けれども、悲しいのでしょう、いやなのでしょうと、赤ん坊を慰める母親は少ない。母親が赤ん坊を自動車の中に閉じこめて遊びにいってしまうような新聞記事を多く見るとき心が痛むが、その底には、現代流の外面的な物の見方が大きくはたらいているのだと思う。

幼児は、外面的な見方をしない。風に木の葉が揺れる音をきくと、何かが運ばれてくるように感じ、お化けがくるのかとこわがる。閉じた箱の中は、幼児にとっては常に魅力であり、不思議さにみちている。内部をもったものは、子どもには生きたものである。子どもの世界は、生きて動いており、それ自身、不思議さをもった内部である。子ども同志は、互いに相手のことを、外側の行動からだけ判断することをしない。そばで見ているおとなにはわからないことを、ちゃんとつかみとっている。おとなのように合理的なけんかの仲裁をしない。けれども、相手の微妙な心持ちを感じたり、いつの間にかなか直りして、遊びつづける。おとなの仲裁は、一面だけをぬき出して善悪を問うことが多く、子どもは自分と相手の生きた内面の全体にふれ

ている。

一体、いつ、どのようにして、おとなの外面的で、一面的な見方がつくられていくのであろうか。

子どもが土いじりを始める。水と一しょにこねて、手もひじも、泥だらけにして遊ぶ。うれしそうで、その動きは生きている。おとなが来て、泥はやめなさいと叱る。叱る時おとなは、子どもの動きをよく見て叱るのではない。子ども自身の外被、洋服がよごれること、その手で壁や家具をさわるとよごれることに、おとな自身ががまんがならないのである。外側をきれいにしておきたい気持ちはだれにでもある。現代は外面を重んずる時代であるから、その面だけが強調されやすい。しかし、他面、だれにでも、きれいに整頓しきれない混沌とした内面がある。何が生まれ出るかわからない、さまざまなものがいりくんでいる混沌は、内面を代表するものともいえる。それはすぐには分類整理することはできないが、時間をかけている間に思いがけないものが生まれ出る母胎である。何が出てくるかわからないものを、時間をかけて待つということは、現代人にはがまんができない。早く、いつでも即座に、美しい結果を見なければ気がすまない。現代というきびしい時代に住む者であるから、それを責めることはできない。しかし、それだけでは、教育という仕事はできないということはいわねばならない。教育は、美しい外側ができる以前の混沌とした内面にこそかかわるものだからである。

土をこねるということは、教育を象徴するものといえる。土をこねるのは、部分品を組み立てる作業とは異なる。混沌としたものに、自分の手で動きをつくり、生命を与えていく仕事である。それは形式にはめる作業ではなく、こねている間に、思いがけない形を生み出す作業である。あらかじめ定められた形を組み合わせて作る意図的な作業ではなく、つくる者の想像力や直観に導びかれてなされる作業である、子どもが土をこねる作業も、おとながなす教育という仕事も、この点で大へんよく似ている。

土という自然の恵みにふれて、子どもは自己の内面を形作ってゆく。土にふれるときの子どもは真剣であり、長い時間、そこに打ちこんで遊ぶ。そこで子どもは混沌から何ものかを生み出す体験をしている。だが、それも外面的にみれば、泥水をはねかえし、洋服をよごす、際限のない子どものいたずらである。よごすのは外側だけである。洗えばまたきれいになる。それを叱ってやめさせる時に、傷を与えているのは、子どもの内面にである。その内面は、現代人には見えにくいのである。

土をこねるということは、子どもの発達の栄養源である。そ

れにもかかわらず、現代の都市生活は、子どもからその栄養素をなくしつつある。高層建築のマンションに住む子どもたちは、親がよほど気をつけなければ、自然物にふれることができない。これは、現代の親にとっても、重大な課題である。同時に、これは、幼稚園のとりくむべき課題でもある。こぎれいなことを好む子どもでも、子どもは原始的な遊びを喜ぶ。その喜び方は、小さいときから自然物にふれ親しんできた子どもたちよりも、一層、はめをはずし、乱雑である。その時期をどのようにしてのりきるかということは、容易なことではない。担任の先生と主任、園長の理解と忍耐を要する。

子どもの行動を、外側から客観的に見ることが科学的であるという考え方が、この二十年ほど、強く支配してきた。私もまた、そのような考え方からなかなかぬけ出すことができなかった。しかし、人間のことを考えるのに、客観性ということは第一要件ではない。人間の生きた内面にいかにしてふれることができ、内なるものがいかにして育てられるかということが重要である。それは、個人の内面というだけでなく、人間の本性にふれることである。まして幼児教育というときに、それは、外的な要素を組み合わせてできることではない。そういう考え方は根本的に間違っている。教育は、内外両面を備えた人間そのものに、じかにぶつかって、そこから生み出していくものでなければならない。それは人間同志の落着いた営みであるはずである。

内面から見る見方ができるように、子どももおとなも、混沌の中からつくり出す喜びをもてるように、一九七三年の宿題は大きい。

幼児の教育　第七十二巻第一号

一月号　定価一〇〇円

昭和四十七年十二月二十五日印刷
昭和四十八年一月一日発行

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします